

# 杉浦康平デザインの動向と エディトリアルデザイン概念の成立についての研究

## STUDY OF TRENDS IN SUGIURA DESIGN AND THE DEVELOPMENT OF THE CONCEPT OF "EDITORIAL DESIGN"

.....  
赤崎 正一 デザイン学部ビジュアルデザイン学科 教授  
戸田 ツトム デザイン学部ビジュアルデザイン学科 教授  
寺門 孝之 デザイン学部ビジュアルデザイン学科 教授  
小山 明 インタラクシオンデザイン教育研究所 教授  
黄 國賓 デザイン学部ビジュアルデザイン学科 准教授

Shoichi AKAZAKI Department of Visual Design, School of Design, Professor  
Tzutom TODA Department of Visual Design, School of Design, Professor  
Takayuki TERAKADO Department of Visual Design, School of Design, Professor  
Akira KOYAMA Interaction Design Institute, Professor  
Kuo-pin HUANG Department of Visual Design, School of Design, Associate Professor  
.....

### 要旨

本研究は杉浦康平名誉教授の1950年代からはじまるデザイン活動の包括的な研究を目指すものである。就中、1970年代～80年代の杉浦名誉教授の活動を中心に成立したと思われる「エディトリアルデザイン」概念の成立過程の検証を重点的な目的とする。本研究の基盤をなすものとして2011年度後半に相次いで開催された「脈動する本」展(武蔵野美術大学美術館)、「メタボリズムの未来都市」展(森美術館)などで明示的になった、1960年世界デザイン会議を契機に展開した戦後デザインの爆発的な拡張の様相への再認識がある。当時の日本デザイン界全体の沸騰の中にあっても、とりわけて実験的であり続けた、杉浦デザインの現代までにいたる50～60年の実践活動の内実を、「エディトリアルデザイン」をキー概念として調査・研究する。以下が研究(平成24年度)の具体的な活動の細目となる。

- 1) 杉浦デザインによるポスターの収集(500～600種程度)と整理・分析→1次リスト完成→さらなる整理継続中。
- 2) 杉浦名誉教授による2002年度視覚情報デザイン学科講義映像記録の整理編集→1次編集完成→記録映像アーカイブ化のための準備中。
- 3) 杉浦名誉教授によるレクチャーをふくむ研究会の開催→2度にわたって実施→レクチャー記録整理中。

### Summary

This course aims at a comprehensive study of Professor Emeritus Kohei Sugiura's design activity which started in the fifties. The ultimate objective of the course is to examine how the concept of "editorial design" was developed around the activities of Professor Emeritus Sugiura in the seventies and eighties. This course focuses on the rediscovery of the dramatic development of postwar design inspired by World Design Conference in Tokyo 1960, which was explored by two exhibitions held in 2011, Vibrant Books: Methods and Philosophy of Kohei Sugiura's Design (Musashino Art University Museum & Library) and METABOLISM: The City of The Future (Mori Art Museum). Sugiura's design has always been incomparably experimental, even during this delirious period for Japanese design. The course examines and studies the 50-to-60-year design practice of Sugiura with "editorial design" as the key concept.

The main activities of the course are:

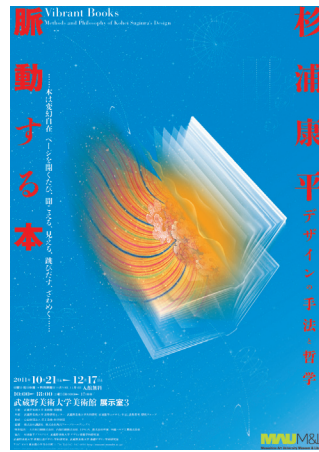
- 1) The collection, classification and analysis of (500 to 600) posters designed by Sugiura (A preliminary list was completed. Further classification and analysis are underway.)
- 2) The editing of videotaped lectures by Professor Emeritus Sugiura for Department of Visual Design in 2002 (The preliminary edition was completed. Preparations for an archived video are currently being made.)
- 3) The holding of workshops including lectures by Professor Emeritus Sugiura (Two workshops have been held thus far. The lecture notes are currently being edited.)

研究活動の背景と動機

デザインは常に時代の中で流動している。その時代のさなかにいる者にとっては、そこで起きていることの意味や価値は確定し得ないままに事態は過ぎていく。一定の年月を経て振り返ったときに、生起した事実の理解にはじめてたちいたようなことは、しばしば経験することである。

社会的なインフラとしての情報伝達や工業生産など、技術分野の変革がデザインに与える影響は絶大だが、しかしそれだけでは真に革新的なデザイン表現が出現するとも考えられない。きわめて強い表現の個人（＝デザイナー）が時代の中で表現の革新を駆動し続けるときに、新しいデザインの領域そのものが出現するのだ、とわれわれは考える。「エディトリアルデザイン」と呼ばれるデザイン領域が現代のビジュアルデザインの表現空間で確固として位置を占めているとすれば、その多くは杉浦康平の半世紀以上におよぶデザイン活動の中に根源を求めることができる。われわれ共同研究参加者にとってはそれは自明のこととしてある。しかしその自明性を詳述することが、いかに困難なことであるかについては、2011年に開催された「脈動する本」展の会場に立った者の誰しもが抱く思いである。その展示規模の量と質は日本におけるブックデザインのこの種の展示としては空前絶後であったが、しかし同時にそれが「全貌」ですらない「抜粋」によるものだと知るものにとっては、個人の名前に帰するデザイン作品群としては、明らかに破格なその量に圧倒されるばかりなのであった。

これまで概観するかぎりにおいては 1970 年代から 80 年代の前半が「エディトリアルデザイン」と呼びうるデザインの施された書籍や雑誌が杉浦とそのスタッフによって多産された時期にあたる。しかし「脈動する本」展で明らかになったのは、その前史にあたる、杉浦にとっては活動の初期の 50 年代から 60 年代の時期にも、現在から見ても「斬新」としか言い得ない作品群があり、それぞれに突出する特異な発想は、すでに「編集＝エディトリアル」的な構造を目指す方向が明瞭に見て取れるということであった。それら初期の実験的作品群から 70 年代・80 年代のもっとも多産な時期の作品への連続をどのように解釈すべきかという、あらたな論点が生じたと言える。



「脈動する本——杉浦康平・デザインの手法と哲学」展ポスター（デザイン＝杉浦康平＋新保韻香、イラストレーション＝山本匠）  
同展は 2011 年 10 月 21 日～12 月 17 日の期間、武蔵野美術大学美術館・展示室 3 を会場として開催された。



「脈動する本——杉浦康平・デザインの手法と哲学」展  
展示計画最終案図面との会場写真

期せずして同時期に開催されていた「メタボリズムの未来都市」展の会場冒頭には 1960 年に東京で開催された「世界デザイン会議」のポスターが展示されていた。杉浦と細谷巖の協働によって制作されたこのポスターの下 4 分の 3 ほどを埋めるグラフィックスは杉浦が自ら作図したものである。多重・多層の幾何形体の「増殖」をイメージさせて、きわめて「メタボリズム」的でもあると同時に、シャープな形態の伶俐さによって無時間的な静謐な印象も強い。（このグラフィックスの制作の意図については後述する研究会レクチャーにおいて杉浦名誉教授自身により具体的な解説がされた。）

「エディトリアルデザイン」の概念は現在では、きわめて確定的に、ビジュアルデザイン領域全体の中で、その位置・範疇は明確なものとなっている。特に 1980 年代にはじまり 90

年代を通じて日本の産業社会のなかにも確固とした新しいシステムとして普及していったDTPの技術は「エディトリアルデザイン」の存在を強力に可視化した。ページレイアウトソフト（初期にはAldus PageMaker、その後Quark Xpress、現在ではAdobe InDesign）と呼ばれるアプリケーションの機能の中に「エディトリアルデザイン」の概念は過不足無く実現されている。しかし多くの実務ソフトウェアがそうであるようにページレイアウトソフトも従来在った印刷・出版業界における複数の職能を連続体として再現するエミュレータにすぎない。ソフトウェアが新しい職能を作ったのではなく、元來見えずらかったエディトリアルデザイナーという職能を顕在化させたにすぎない。現在のような自覚的なエディトリアルデザイナーの存在がいつから日本社会の中に出現したかについては、さまざまな検証が必要だが、その淵源に50年代からはじまる杉浦デザインの数々が深く響鳴していることは疑いようもない。本研究の目的はその膨大な量の作品の一端なりとも確実に時代的な位置づけを確認していくことである。

\*

以下に本研究の個別の活動の概要を記す。

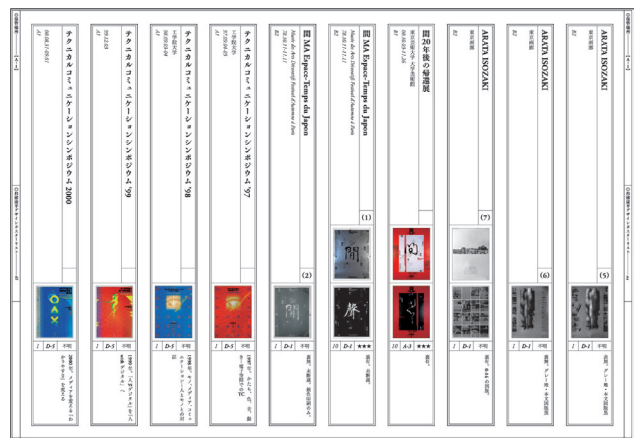
1) 杉浦デザインによるポスターの収集と整理・分析

従来からビジュアルデザイン学科内には杉浦デザインによるポスター類が少量ではあるがストックされていた。それに加えて研究期間の早い時期に古書市場でかなりのまとまった量の杉浦ポスター・コレクションを購入することができたことにより、このポスター・アーカイブの企てがはじまった。またその後、主旨を理解いただいた杉浦事務所から、かなり貴重な60年代の初期作品をご寄贈いただいたことにより本プロジェクトは一層の内容の充実を目指してスタートした。

第1段階として未整理状態のサムネール・リストを作成し、それを基盤として年代・カテゴリー・クライアントなどでくれるグルーピングをして、ビジュアルデザイン学科棟内に新設した専用大型マップケースの棚ごとにナンバリングして、あらたに高解像度デジタル撮影をしつつ収納をすすめた。（この作業については研究助成として継続採用された25年度の共同研究へも引き継がれて、収納・リスト化をすすめた結果、今



「メタポリズムの未来都市」展の会場導入部分、「世界デザイン会議 1960」のコーナーに展示された世界デザイン会議ポスター（デザイン=杉浦康平+細谷巖）



第1次リストのうち2012年度中作製分。上はページの事例。下は部分の抜粋アップ。ウラ面がデザインされている場合にはウラ面のサムネールも掲載した。全体は2013年7月に完成。（この形式で現状62ページ分となっている。）

後の研究の基盤となりうる第1次リストが13年度前期期間中に完成を見た→図版参照。現在はこの第1次リストの内容の校閲的検証をすすめている。）

杉浦デザインの特徴として多くの異バージョンの存在するものが多く、その総数のカウントが非常に困難な状況ではあるが、現在第1次リストに掲載できたものが500～600種程度となっている。

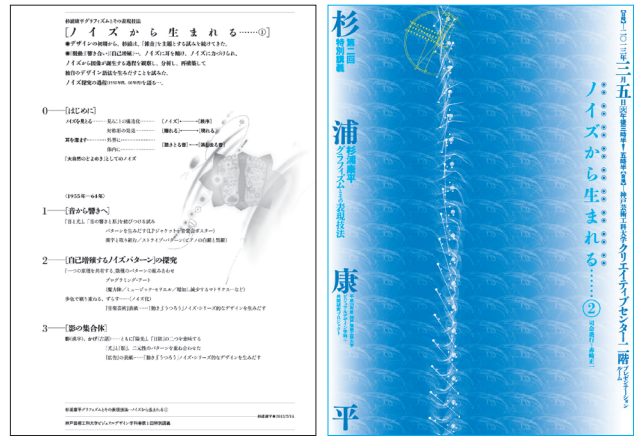
この「ポスター・アーカイブ・プロジェクト」は今後もさまざま研究活動に寄与しうよう継続して収集・整理をすすめる。（25年度の研究では残存数が少ないことから入手がきわめて困難と考えられていた「世界デザイン会議」ポスターについてもほぼ収納の目処がたった。）

## 2) 杉浦名誉教授による2002年度視覚情報デザイン学科講義映像記録の整理編集

このプロジェクトについては当初の研究計画にはなかったものである。本研究代表者がポスター収集や研究会レクチャーの件で杉浦事務所を訪れていた際に事務所スタッフの新保韻香氏より講義映像記録のミニDVテープが大量に提供された。ミニDVそのものがソフト・再生ハードともに消滅寸前の規格であり、記録内容の確認のためにも処理を急ぐこととなった。内容は新保氏が本学大学院の修士課程に在籍中に杉浦教授指導の院生グループにより学部（視覚情報デザイン学科）の図像論系の複数の講義科目を自主的に記録したものである。

エディトリアルデザインの思考の中に萌芽を持つと考えられる杉浦図像論（アジア図像論）の講義記録として貴重であると判断し、映像の内容を確認しつつ、RAID化してバックアップを組んだHD上にコピーをすすめ、記録内容のリストを作成した。

これらの記録を講義科目ごとに不要な部分をカットする作業・タイトルを加える作業などをしつつ、現在の25年度分の研究活動としても継続中である。映像記録としても活用できるようにするとともに、文書記録化も将来の課題として、本共同研究全体の中の記録に採録し、位置づけることを計画している。



右の図はレクチャー「ノイズから生まれる」第1回（2013年2月14日）のレジюме

左の図はレクチャー「ノイズから生まれる」第2回（2013年3月5日）の学内告知用ポスター（デザイン=杉浦康平+新保韻香）

## 3) 杉浦名誉教授によるレクチャーをふくむ研究会

2013年2月14日と3月5日の2回（各4時間ほど）に分けて、杉浦名誉教授自身による「ノイズから生まれる」と題したレクチャーをしていただき、その後の質疑応答もふくめた形で開催した。これまでも「アジア図像論」については多くの講演活動をされてきた杉浦名誉教授であるが、自身のデザインの制作の技法にかかわるようなことについてはほぼ語る事がなかった。にもかかわらず本レクチャーでは50年代から60年代の初期作品を中心に、「ノイズ」概念を援用して、きわめて自律性の高い図形構造の生成システムについて詳細に解説をいただいた。多くの作品事例とともに数理的に構造化された形態生成の展開プロセスについてのプレゼンテーションは、非常に画期的なレクチャーとなり、本研究参加者のいずれにとっても圧倒的な興奮を呼び起こすものとなった。映像・音声の多重バックアップ体制のもとで記録された、この2回のレクチャーについては、現在慎重にテキスト化・映像の整理編集をすすめている段階である。

\* 本共同研究は平成25年度分の研究助成もいただいて現在も上記の各研究記録の整理・解析中である。ひきつづき学内・学外を問わず多くの方の協力を得て、活動を継続・展開していく予定である。